新潟青陵大学大学院
臨床心理学研究　2016. vol. 9　17～20

高齢者施設における押花クラフト６年間の歩み
－ Aさんの生きがいとなった押し花制作 －

松田　美穂[1)]・高崎富貴子[1)]・高山　玲美[1)]
野本亜紀美[1)]・高村麻理子[1)]・清野　泰宏[1)]
１）特別養護老人ホーム　ジェロントピア新潟

キーワード：押し花、施設におけるレクリーション、生きがい

Six-year-experience of pressed flower in Special Nursing Home for the Elderly
－ Production of pressed flower became a reason for living for an elderly woman“A” －

Recreation is not only important for improving mental, physical activities of the elderly persons in Special Nursing Home for the Elderly but might also useful for increasing motivations of stuffs in the same home.

Miho MATSUDA[1)], Fukiko TAKASAKI[1)], Remi TAKAYAMA[1)]
Akimi NOMOTO[1)], MarikoTAKAMURA[1)], Yasuhiro SEINO[1)]
1）Special Nursing Home for the Elderly“Gerontopia Niigata”

Key words：pressed flower , recreation, something to live for

Ⅰ．はじめに

特別養護老人ホーム（以下特養）は、平成12年より始まった介護保険制度では介護老人福祉施設とも呼ばれ、常時介護が必要で、自宅では介護が困難な高齢者が入所する施設である。施設サービス計画に基づいて食事、入浴、排泄などの介助、日常生活の世話、機能訓練、健康管理などのサービスを受けることができる（文献１）。

平成27年４月からは介護保険制度の改正により、新規の入所基準が原則要介護３以上となり、より重度の方の受け入れ施設となった（文献１）。ジェロントピア新潟でも開設時に比べ、日常生活活動度（Activities of Daily Living：ADL）の低下の著しい方や重度認知症の方の入所が多くなっている。

特養は利用者が終の棲家として最後まで生活をされる場所である。高齢者が人生の完成期を過ごす施設だからこそ、季節の移ろいが感じられるように施設内外に木や草花を植え、日々の生活に楽しみが見出せるようにレクリエーションや行事に力を入れてきた。しかしながら利用者の重度化によりレクリエーションの実施自体が難しくなってきている。このような状況の中で、６年間に亘り自らレクリエーションの準備並びに運営に携わっている方が居られるので紹介し、特養におけるレクリエーションの意味について考察する。

Ⅱ．事例

１．事例　Aさん　89歳女性

Aさんには腰部脊髄損傷後遺症、高血圧症、胆のう炎、逆流性食道炎、便秘、不眠があり、要介護４で障害高齢者の日常生活自立度はB２、認知症高齢者の日常生活自立度はⅠである。改訂長谷川式簡易知能評価スケール（Revised Hasegawa Dementia Scale：HDS-R）は26点（平成26年６月24日施行）

で、平成27年７月27日施行のVitality Indexは９点、Mini Mental State Examination（MMSE）は26点である。

（生活歴・家族歴）

手芸教室を主宰していたが夫の死亡後独居となる。３人の娘がいるがそれぞれ独立している。平成11年、73歳の時に交通事故により、腰椎部脊椎損傷、右下肢切断、左大腿骨骨折、骨盤骨折の重傷を負った。その後遺症として下肢麻痺並びに排泄障害が残り、第１種身体障害者、等級１級に認定された。平成18年12月５日に当施設に入所され、現在も施設で生活をされている。

２．押し花クラフト

当施設では、開設当初より利用者の家族の指導により押し花クラフトが行われてきた。３年後、利用者の退所により家族の協力が得られなくなり、活動の継続が危ぶまれた。その際、Aさんが押し花クラフトへの協力を申し出てくれた。自らが押し花クラフトの素材となる押し花の製作をし、運営にも協力し、活動を存続させたいというものだった。押し花制作は手間隙がかかるため、大概の場合は指導者が準備する。それを利用者が中心となり押し花の準備から運営までを行うという取り組みは、筆者にとっても初めての経験だった。Aさんは現在まで６年間継続して、年中豊富に押し花クラフトに使用できる押し花を作り続けている。

押し花クラフトは、「好きなだけ気兼ねなく押し花を使って欲しい」というAさんの思いが共感を呼び、「押し花クラフトだけは参加したい」という方も居て、月１回の開催であるが毎回12～13人の参加がある人気のレクリエーションとなった。利用者が主体となって行っているレクリエーションであることが、他の利用者の励みにもなっている（写真１，２）。

（押し花制作の方法）

Aさんは元々生け花をやっていた経験があり、彼女の押し花の制作方法は独自に編み出したやり方で、施設で要らなくなった段ボールなどをうまく利用している（文献２）。

⑴　押し花用の段ボール台紙制作　（写真３）

段ボールを25センチ角の正方形に切り押し花用の台紙を作成する。段ボールを切るのは高齢者にとって手の力がいる作業だが、Aさんは自ら300組以上の台紙を作成した。

⑵　花を切り整える　（写真４）

草花を摘み取り、押し花用に切り整える。花を摘み取る作業も重要で、押し花に適したサイズの草花を最も適した時期に天候と相談して摘み取らなければならない。そのため年中窓の外を眺めて摘み取る時期を見計らっているそうだ。材料に使う草花のほとんどは施設周辺のものである。

⑶　花を並べる　（写真５）

次に台紙の上にティッシュペーパーを乗せて、その上に一つ一つ丁寧に花を並べる。この並べ方にも工夫が必要で、出来上がった時に使いやすいように、同種類の花や葉をなるべく同じ方向になるようにまとめていく。

写真１　押し花クラフトの様子

写真２　ホール脇の作品展示

写真３　押し花用段ボール台紙制作

写真４　花を切り整える

写真５　花を並べる

写真６　押し花を挟む

写真７　押し花の保存

⑷　押し花を台紙に挟む　（写真６）

仕上げは花を挟んだ段ボール台紙を重ね合わせて、輪ゴムで中の花がずれないように注意し挟む。はじめは２日に１回ティッシュペーパーを交換し、その後は草花に応じて１週間に２回程度交換する。大抵１ヶ月程で完成するが、完成まで４～５回ティッシュペーパーを交換しなければならず手間ひまのかかる作業である。特に春の花は水分が多いため交換回数が多くなり、チューリップ、山茶花、たんぽぽなどは、完成まで10回以上も変える必要がある。逆に秋の草花は水分が少ないから作りやすく、ビオラやスミレは押し花に適しているそうだ。全てAさんの経験から得た知識である。

⑸　押し花を保存する　（写真７）

完成した押し花は、ユニット内の棚に出来上がりの日付と種類を明記して保存する。新潟は冬が長いため、Aさんは１年分の押し花を計画的に作り、保存している。

Ⅲ．考察

自らが中心となって能動的に行う活動は、全てお膳立てをしてもらいそこに参加するだけの活動とは異なり、モチベーションが向上し自己達成感が得られやすい。Aさんは「自分も楽しんでいるし、他の人も喜んでいるのを見るのが嬉しい。私の生きがい」と言う。矢富は、「楽しくないと脳の機能は使えない。更に受け身ではなく主体的に脳を使うことが重要である」と述べている（文献３）。また、須貝は「知識の習得や技術の獲得、判断などに脳を使えば使うほど、脳内の神経ネットワークが構築されて、それが「認知的予備力」となり、結果的にアルツハイマー病の発症を遅らせることにつながる」と述べている（文献４）。Aさんは年相応の物忘れはあるもののHDS-Rは現在26点であり、認知機能の維持が図られ、自発性、活動性の向上がみられている。周りの草花を観ることで養われる観察力や何時どの花を摘むのか、そしてその草花をどのようにアレンジするかという計画力、発想力も鍛えられている。

Aさんの事例を通して施設における様々な活動では、「やりがい、生きがい、自己実現」が体験できるような活動にする事が重要である事を学んだ。押し花クラフトにおいて自らが制作した押し花が活用され、喜ばれているのを見るという体験は、神田橋の述べる「受け身の立場から自主的立場への変換」ともいえる（文献５）。更にAさんにとって押し花クラフトは『自分が人の役に立っている』と感じられる重要な活動で、マズローの欲求階層説（文献６）に基づく最高位の欲求である自己実現欲求が満たされる自己肯定、自己実現につながる活動となっているといえよう。

千葉によるとレクリエーションとは、「こころとからだを豊かに育み、より楽しい生きる喜びに満ちた人生の創造を可能にする諸活動」であるという（文献７）。つまりレクリエーションの目的とは単なる楽しみの提供ではなく、生きる意欲や生活の質（Quality Of Life：QOL）の向上を目指すものであり、高齢者施設においては、食事、入浴、排泄という三大介護に匹敵する重要なケアの一つだということができる。実際に利用者の多くの笑顔を見る機会を得ることができるのは、レクリエーションや行事である。活動性が落ち表情が乏しくなった方でも、レクリエーションを通して思いがけない活発な行動や積極的な会話をされることがあり、その方の能力を過小評価していたと反省させられることもある。利用者に対する理解を深めるためにも、楽しんで参加している利用者と接することは重要である。

介護職員にとって、日々ADLが低下し体力や気力が弱っていく利用者をケアしつづけることは心理的につらいことである。しかし、利用者の楽しむ姿は介護職員に達成感を与え、元気づける。利用者の笑顔はケアに携わる職員の仕事への意欲につながり、モチベーションの向上など相乗効果を生む可能性がある。今後は施設におけるレクリエーションの介護職員に対する効果を検証していく予定である。

Ⅳ．まとめ

今回高齢者自らが自主的に企画、運営に携わるレクリエーションが、自己実現欲求を満たし、生きがいとなり得ることを経験した。

更にレクリエーションは、高齢者施設の利用者の心身の機能の維持・改善に役立つばかりではなく、それに携わる職員の精神的な安定と労働意欲を高める可能性がある。今後の課題としては、職員自身も楽しみ利用者にも楽しんでもらえるようなプログラムの開発と、職員のレクリエーション実践能力の向上が挙げられる。

【謝辞】

本論文を執筆するにあたり、執筆を快く承諾して下さったAさんとご家族に心より感謝申し上げます。

【付記】

本事例は平成26年11月、平成26年度全国老人福祉施設研究会議（香川会議）にて発表を行いました。

Ⅴ．引用・参考文献

１）介護保険サービスガイド（2015）、新潟市、36.
２）花と緑の研究所（1997）：世界でたった一つの押し花はがきの作り方、日本ヴォーグ社.
３）矢富直美（2002）：痴呆はどこまで防げるかどこまでよくなるか、（財）東京都老人総合研究所、104.
４）須貝佑一（2005）：ぼけの予防、岩波新書、155－157.
５）神田橋條治（2015）：精神科講義、創元社、050－062.
６）A．Hマズロー著・小口忠彦訳（2005）：人間性の心理学、産能大学出版部、145－161，242－251.
７）千葉和夫（1994）：老人のレクリエーション、全国社会福祉協議会、２－７.